法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

陶淵明と民俗 ： 「良辰奇懐に入る」について

安藤, 信廣 / ANDO , Nobuhiro

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
38
(開始ページ / Start Page)
19
(終了ページ / End Page)
28
(発行年 / Year)
1987-12-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019530

論文

陶淵明と民俗

――「良辰　奇懐に入る」について――

安藤信広

一

民俗と文学との接点を中国文学の中にさぐることは、二重にも三重にもむずかしい問題をともなう。何よりもまず、外国の民俗と文学であるから。たとえとおい方言でも、沖縄の歌ならば、言葉によってゆりおこされる感慨と、体の中にひそむ自分をうごかすしくみとが、自然にうごきだす。

三重城にのぼて手巾持上げれば
早船のならひや一目ど見ゆる

読み人もわからないこの「花風節」の流歌を、まず読みあやまる人もいまい。一目しか見えない早船にむかって手巾をふろうとする女の、せつない悲しさ。外間守善氏の次のような読みが示されれば、心は体とわかちがたく一つであることを、知らされる。

「手巾持上げれば」という表現は、

茜さす紫野ゆき標野ゆき
野守は見ずや君が袖振る（額田王）

石見のや高角山の木の間より
わが振る袖を妹見つらむか（柿本人麻呂）

という万葉歌の、袖を振って愛の心を表現するという歌によく比べられるが、この琉歌では、持った手巾を振ることができないほどに、重々しく打ちひしがれている。つまりそれが、いつも残される側に立たされた島の女の宿命的な悲しさでもあるわけで「持上げれば」としか表現できなかった心の悲しさとその表現を、この歌の心くばりされた修辞としてくみとる目が必要である。

（外間守善『沖縄文学の世界』）

この歌につづく「述懐節」の心のしずかなせめぎあいを、この歌

はもう内包している。が、そのことをはなれて、手布（ティサッ）や袖を振るしぐさのことを考えてみれば、それがどのような意味をもちどのような情感をともなうのか、誰もがいつのまにか知っている。体の中にくみこまれた記憶、としか言いようのないように。そして、それが「ひれ」（領布、肩布）を振るならいと結びついていて、「ひれ」に神秘的な力を感じていた祖先たちの意識が、なりかわり生まれかわりして今に生きている、と気付けば、自分という現象の奥ふかさに驚かされる。

韓国（からくに）の城の上に立ちて
大葉子（おほばこ）はひれ振らすも
日本（やまと）へ向きて

（『日本書紀』欽明二十三年）

朝鮮半島から日本列島にむかって「ひれ」を振る――その雄大なしぐさも、「ひれ」が霊的な力をもっているからだった。大海人皇子も人麻呂も、また三重城にのぼった女性も、こうした伝統の上にたって、体をうごかし言葉をつむいでいる。それを自分につながるものとして了解できる。だが、中国文学ではそうはいかない。

次に中国自身の民俗研究が、ようやく端緒についたばかりであるため。日中戦争以前に、先駆的なしごとがなかったのではない。しかしそれは、日中戦争と内戦のたてつづけが、とだえさせてしまった。解放後も、まずは旧習の打破をめざす政府であり社会であってみれば、民俗学はよって立つ基盤をみつけにくかったのだろう。何より肝腎な現代の民俗の研究が、発想として成立しなかった。もしくは、成立しづらかった。日本の研究者はフィールド・ワークにたずさわる可能性を、ほとんど手に入れられなかった。それを手に入れたとしても、文化人類学者ならいざ知らず、中国文学の研究者は二の足をふんだにちがいない。ただ長い文献主義のせいばかりでなく、あまりにもちかよりがたい広さと研究情況のために。

ほかにも、いろいろ理由はある。長い経学の伝統が、常民の日常をありのままにみつめさせなかったこと。中国の文明の「合理性」や「進歩性」をつよくとなえようとする傾きが、第二次大戦後におおきくなり、いきおい、それにみあう対象をとりあげようとしてきたこと。その他。

だが、最もおおきな理由は、文学と民俗の接点をとらえるという課題そのもののむずかしさ、である。かりそめに、接点をとらえるというような言いかたをしたが、抽象的な民俗と文学とが数学的な一点でまじわるわけではない。民俗というのは、それが研究の対象になろうとなるまいと、実は人間のありかた、生活の基底そのものにほかならない、と思う。だから、文学の片言隻句も、つきつめれば生活のならいから自由ではあり得ない、そのような意味で民俗の根をもっている。だが、だから二つのものはいつでも接点をもっている、ということにはならない。文学が生活のならいをうけとめて、のっぴきならない表現の場に何を生みだしてゆくか、そういう現場にたちあわないかぎり、民俗と文学の接点とはいえない。中国の古典文学の中にわけいってそういう現場にたちあえるか、この深いおそれが研究者たちをたじろがせてきたのである。

二

背のびを承知で、文学の側から、民俗と文学の接点をさぐってみようかと思う。

だが、とりあげることがらは、とても小さい。陶淵明（三六五―四二七）の詩の中にたびたび出てくる「良辰」（よい日）とはどういう日なのか、という問題につきる。陶淵明は、よくこの言葉やこれに似た言葉をつかう。あまりにも簡単な言葉なので、あらためて注釈さえつけられないことが多い。だがさて「良辰」（よい日）とは何がどう良いのか、と考えると、分からなくなる。その中味はかえりみられることもあまりなかった。

「良辰」という言葉は、辞書の中では次のようにときあかされている。辞書は、手もとの『広漢和辞典』（大修館書店）下巻。

よい日。めでたい日。吉日。佳辰。気持ちのよい日。

ずいぶんたくさんの訳語がならんでいる。だが典型的なものをえらんで整理すれば、「めでたい日」と「気持ちのよい日」の二つになるだろう。宗教的、または民俗的な意味あいをもつ「めでたい日」なのか、単に気候上の「気持ちのよい日」なのか。

あるいはことこまかに過ぎるこのような問題に、なぜ注目するのか、ことわっておこうか。一つには、こんなに小さな一言でも、中国土着の民俗と外来の仏教との出あいかたを、示さぬともかぎらないからである。もう一つには、文学的想像力に民俗がかくれたかかわりをもつ、そのかかわりかたを、すこしは見せてくれるかもしれないからである。

さて、陶淵明は「良辰」という言葉を次のように用いた。

和劉柴桑　劉柴桑に和す
山澤久見招　山沢より久しく招かるるも
胡事乃躊躇　胡事ぞ乃ち躊躇せる
直爲親舊故　直だ親旧の為の故に
未忍言索居　未だ索居を言ふに忍びず
良辰入奇懷　良辰　奇懐に入り
挈杖還西廬　杖を挈へて西廬に還る
荒塗無歸人　荒塗　帰人無く
時時見廢墟　時時　廃墟を見る
茅茨已就治　茅茨　已に治に就き
新疇復應畬　新疇　復た畬に応ず
谷風轉凄薄　谷風　うたた凄薄
春醪解飢劬　春醪　飢劬を解く
弱女雖非男　弱女　男に非ずと雖も
慰情良勝無　情を慰むること良に無きに勝れり
栖栖世中事　栖栖たり世中の事
歳月共相疎　歳月　共に相ひ疎んず
耕職稱其用　耕職　その用に称はば
過比奚所須　これに過ぐるは奚ぞ須むる所あらん
去去百年外　去り去りて百年の外

身名同翳如　身名　同に翳如たらん

詩題の「劉柴桑」とは、柴桑県令だった劉遺民（本名は程之、字は仲思。三五四？―四一〇？）をさすとかんがえられる。その人は、廬山の慧遠（三三四―四一六）を中心とした仏教教団「白蓮社」の、おもだった構成員である。その劉柴桑からのまねきを謝絶するのが、この詩の主旨らしい。「長いあいだ山沢のあなたのすまいからまねいていただいたが、私はどうしてためらっているのか。それは、ただただ親しい者たちのためなのだ。彼らにむかって、おまえたちから離れてくらす、とは言えないからだ。」劉柴桑のまねきというのは一時のものでなく、家族を捨てることが前提だったかのようである。とすれば、世間を捨てて「白蓮社」にくわわるように、とのすすめだったのだろうか。

劉柴桑のまねきをことわったところで、ふいにあらわれるのが、「良辰」である。「よい日が、私の奇妙な懐のなかに入りこみ、やおら私は杖を手にして、西の廬にかえってみた。」このような言いかたを、前の四句につなげることが可能だろうか。そしてまた、「良辰」が「奇懐」に入るという表現の、わかりにくさ。いきなり「西廬」にかえる、ふしぎさ。

論証を後にして、結論をのべた方がよいだろう。「良辰」という言葉は、なるほど「気持ちのよい日」という意味あいをつよくしつつあったが、陶淵明にとっては、民俗と宗教にむすびついた「めでたい日」の意味あいをよりつよく持っていた、と思われる。あるいはそうまで言えないにしても、「気持ちのよい」という感覚の中には、「めでたい」という感覚がひそんでいた、と思う。「めでたい日」であればこそ、それはいつのまにか私の心に入りこんでくる。そしてそれは私の心を奇妙にものぐるおしくさせる。「西廬」というのは、何孟春の注によれば、作者がかつてすんでいた上京（地名）の旧居。ふいにそこへもどってみようとするのも、「良辰」が祖霊などとの交歓の日だったからではないか。旧居へかえる道すがら、しきりにうちすてられた「廃墟」に目をむけるのも、そこにそれぞれの祖霊がもどるはずだから、と考えられないか。たとえば、いとこの仲徳という人をうしなったのち、その人をしのんだ「従弟の仲徳を悲しむ」（悲従弟仲徳）詩では、その旧居を訪ねている。

銜哀過舊宅　哀しみを銜みて旧宅を過れば
悲涙應心零　悲涙は心に応じて零つ

「過」るというのは、通り過ぎるのではなく、訪問すること。だが、おとずれたその家は、主のない「廃墟」だった。

雙位委空館　双位　空館に委ねられ
朝夕無哭聲　朝夕　哭声無し
流塵集虚坐　流塵　虚坐に集まり
宿草旅前庭　宿草　前庭に旅す

夫婦ともどもに他界したらしい。二人のために哭いてくれる声もなく、塵が二人の座席につもり、前庭には草がのびたまま。まこと

に胸をつくありさまなのだが、では淵明はなぜこの「空館」をおとずれたのか。いとこへの思いにかられて、死そのものへの感慨にうごかされて、のこされた二人の幼児を見かねて、などといろいろに答えられる。だがその水面化に、死者の霊魂がここにただよいここにもどるという信仰が、かくれているのだろう。

つづいて淵明がえがくのは、田園のありきたりの日常である。新しい疇のたがやし。春風はつめたいが、つかれをいやしてくれる醪。男ではないから数のうちには入らないが、それでも私をなぐさめてくれるおさない娘。歳月のはやさも、私にはかかわりがなくなった。要るだけの食べものと着るものがあれば、それ以上はもとめない。百年といわれる人生がおわれば、肉体も名声も、みな闇の中にきえるのだ。

三

陶淵明がなぜこうした日常の表現をしようとしたのか、そのことによってなぜ劉柴桑のまねきをことわろうとしたのか。それはすこし後でかんがえることにして、「良辰」という言葉が民俗に根をもっていることを、他の例によって見さだめておきたい。まず、淵明自身のもの。

答龐參軍・其六　　龐參軍に答ふ・其の六

慘慘寒日　慘慘たる寒日
肅肅其風　肅肅たるその風
翩彼方舟　翩たるかの方舟
容裔江中　江中に容裔す
勗哉征人　勗めよや征人
在始思終　始めに在りて終りを思へ
敬茲良辰　この良辰を敬しみ
似保爾躬　もって爾の躬を保て

都へ公務でおもむく龐參軍にあたえた詩。船に乗っていましも旅だとうとする人に、この「良辰」をつつしんで旅だち、その身をたいせつにせよ、と呼びかける。ここでの「良辰」が、それほど「気持ちのよい日」でなかったらしいのは、「慘慘たる寒日」という出ばなの句でわかる。そんな日を「良辰」というのは、出発に際して「めでたい日」をえらんだからだろう。さもなければ、出発の日を「めでたい日」とことほいで、門出を祝ったのだろう。日常のならいにもとづいた言いまわし、と考えられる。

感士不遇賦（部分）　士の不遇に感ずる賦

商盡規以拯弊　商は規を尽くしてもって弊を拯ひ
言始順而患入　言始めには順はるるも患ひ入る
奚良辰之易傾　なんぞ良辰の傾き易き
胡害勝其乃急　胡ぞ勝れるを害ふことそれ乃ち急なる

不遇の人生をしのんだ士を、上古から順にかぞえあげて、感慨をのべた賦。漢の王商がすぐれた建議をたびたび天子にみとめられたのに、出世をねたむものの上書によって丞相を免じられた、そのこ

とを淵明はむすびの一例とする。そして、なぜ「良辰」はこんなにも傾えりやすいのか、と問う。淵明の感慨はまだまだつづくが、今それはおく。この「良辰」も、「気持ちのよい日」では、おちつかない。「めでたい日」の方が、すわりがよい。さいわいにみちた時間、特別にえらばれたよろこばしい日。土に根づいた信仰がとりわけて祝うことをゆるす「めでたい日。」そういう日は、またたく間におわるから、すぐれた人物のかたときの栄光を「良辰」に比喩することができたのだろう。

彼の代表作にもこの語はみられる。

歸去来兮辭（部分）　帰去来の辞

富貴非吾願　富貴は吾が願ひに非ず
帝鄉不可期　帝郷も期すべからず
懷良辰以孤往　良辰を懐ひてもって孤り往き
或植杖而耘耔　或ひは杖を植てて耘耔せん
登東皐以舒嘯　東皐に登りてもって舒嘯し
臨清流而賦詩　清流に臨みて賦詩せん

義熙元年（四〇五）十一月、彭沢県令の地位をなげすてて故郷の田園に帰った淵明が、その心境をのべた作。この地上の富も身分も、この世の外のとこしえの命も、あてにしない。「良辰」をしたってでかけてゆき、時には野良しごとにはげもう。皐にのぼってうそぶき、流れの岸にたって詩をくちずさもう。

この「良辰」は、「気持ちのよい日」でも十分に通じる。そのような意味あいをつよめてもいたのだろう。けれど、この日がのらしごとにむすびついたり、岡にのぼることや流れの岸にでかけることとむすびついたりするらしいのは、天気のせいとだけはいえないようだ。この作品のできあがったのは、義熙二年（四〇六）一月から二月ごろだろうか。「農人　余に告ぐるに春の及べるをもってす」と、この作品の前の方にあるのが、それを証明する。前年の十一月に田園にかえってきた作者に、農夫が春を告げてくれた。それは、のらしごとのはじまりを知らせることでもあった。陶淵明自身が別の詩（癸卯の歳、始春、田舎に懐古す・二首）のなかで、

鳥弄歡新節　鳥弄りて新節を歓び
冷風送餘善　冷やかなる風も余善を送る

鳥が鳴きかわして新しい春の季節をよろこび、またつめたい風もゆたかな恵みを送ってくれる、と農耕のはじまりの時をえがくのを見れば、畑しごとのはじまりは題名にいう「始春」おそらく一月だったのだろう。

春は行楽の季節だったこと、ずっとくだって初唐の劉希夷の詩（代悲白頭翁）に「三春の行楽」という言葉のあることからも、あきらかである。だがそれは、天気がよいからではなく、本来は民俗にねざす行事がおおかったからだ。農耕の民にとって、農耕のはじまる春が特別の意味をもつ時であるのは、中国にかぎったことでない。この時期にたくさんの行事が集中するのは、あるいはあたりまえかもしれない。いま陶淵明の「歸去来兮辭」にえがかれていると思わ

れる一月の行事だけに限ってみても、うちつづく行楽はおどろくほどだ。元旦のことはのぞいて、『荆楚歳時記』（梁の宗懍の者。長江中流地方の年中行事を記録したもので、隋の杜公瞻が注をつけているが、本文と区別できないものが多く、ここでは同列にあつかっておく。いずれにせよやや後の資料である。）によって例をあげてみる。

〈1〉正月七日を人日と為す、七種の葉を以て羹を為る。綵を翦りて人に為り、或いは金箔を鏤りて人を為り、以て屏風に貼る。亦た之を頭鬢に戴く。亦た華勝を造り似て相ひ遺る。高きに登りて詩を賦す。

〈2〉『呂氏俗例』に云う。其れ初めの七日、楚人、南北二山の土を取り、以て人像一頭を作り、正南を向かしめ、庭中に建立し、其の側に集宴す。陰を却け陽を起す。即ち人北を以て冬気と為し、陰気の禍を拒ぎ、人南を以て春気と為し、陽気の祜を招く。故に名づけて人日と云ふなり。

〈3〉〔立春の日〕、施鈎の戯を為す。縄を以て箋纜（竹の皮をさいたものをよりあわせた綱）を作り相ひ胷く。綿綿として数里に亘り、鳴鼓せば之を牽く。

〈4〉又た（立春の日）打毬（「蹴鞠」つまりわが国の「けまり」とする説と、ポロPoloとする説がある）・鞦韆（ぶらんこ）の戯を為す。

〈5〉石虎の『鄴中記』に、正月十五日、登高の会あり。則ち登高も又た今世にして然るものに非ざるなり。

〈6〉元日より月晦に至るまで、並びに酺聚（あつまって酒を飲む）飲食を為す。士女、舟を泛べ、或いは水に臨んで宴会し、行楽飲酒す。

〈7〉案ずるに、毎月皆な弦・望・晦・朔あり。正月は年を初むるを為すを以て、時俗、之を重んじ以て節と為すなり。『玉燭宝典』に曰く。元日より月晦に至り、人並びに酺食〔を為し〕水を渡り、士女悉く裳を湔ぎ、酒を水湄に酹ぎ、以て厄を度ると為す。今の世の人、唯だ月晦に河に臨んで解除（みそぎなどをして穢れをとりのぞく）し、婦人或いは裙を湔ぐ。又た是の月、民並びに脯食す。醵脯の名、又た之に似たり。銭を出すを醵と為し、食を出すを脯と為し、竟って朋に分かれて摴蒱（弓をもちいた賭けごと）す。名づけて博射と為す。『芸経』は擲博に為る。

〈5〉と〈7〉は、杜公瞻の注と考えられる。それにしても、高いところに登って詩をつくったり〈1〉〈5〉、庭で宴をひらいたり〈2〉、数里にわたって総出で綱ひきをしたり〈3〉、ポロやブランコをしたり〈4〉、水辺で宴会をしたり〈6〉〈7〉、にぎやかなことはこの上ない。陶淵明のかえった田園は、こんなにもにぎやかな世界だったのである。隠者であるからには閉塞していただろうと思うのは、誤りだ。

「歸去來兮辭」の「良辰」にもどれば、それを「天気のよい日」や「気持ちのよい日」とだけみなすのは、十分ではない。むしろ、それが本来「めでたい日」だったからこそ、そしてその日にはしばしば屋外の行楽がされたからこそ、「天気のよい日」であり「気持

ちのよい日」であることを期待されたのだろう。「めでたい日」と「気持ちのよい日」がかさなってくるのは、ただの偶然ではなく、自らの歴史によってなのだ。淵明が「良辰」にひかれあくがれ出て、のらしごとをはじめようとしたり、岡に登ったり水辺で詩を作ろうとしたりするのは、孤高の知識人のすがたといおうより、常民のならいをうけついだすがたと見るべきだろう。この「良辰」が一月七日なのか、十五日なのか、晦日なのか、立春の日なのか、または二月の方にずれこんでいるのか、もちろん特定できない。あるいはそういう行事の日以外にもまだまだたくさんあった「めでたい日」かもしれないし、のらしごとにかかる日を「めでたい日」とことほいだのかもしれないし、岡にのぼり水辺に立つのも年中行事からは一応はなれていたかもしれない。だがそれでも、行楽をともなう「良辰」という時間に体験される感覚が、淵明の体の中に深く生きていると考えなくてはならない。「良辰を懐」うという感覚、それは民俗の根にささえられている。柳田国男が日本の子どもの遊びのそうした根をみせてくれた一文を、かりそめに参考としてひこう。

女の児のままごとのごときは、今でも儀式として真剣に行う例が各地にある。辻飯・門飯・川原飯、さては盆竈などというのがそれであって、盆やその他の一年の節日に、屋外で本物の煮炊きをして食うので、主として成女期に臨んだ娘たちがこれに携わり、それより小さい子も楽しみにして手助けをする。目的は道路に精霊を饗し返すことにあったらしいが、そんなことには構わず面白いから、草の葉や穂蓼の実をむしって、毎日のようにこの真似をくり返すのである。（「昔の国語教育」『国語の将来』所収）

かたや淵明の国の綱引きもポロもブランコも登高も水辺の宴会も、すべて豊穣を祈ったり精霊を饗したりする信仰に、深い起源をもっている。そのたぐりよせようにもたぐりきれない歴史があればこそ、「良辰」は「懐」わしいのであり、自分の心を「奇」しい「懐」にし、その中に「入」りこんでくるのである。

四

陶淵明の用例をはなれて、他の詩人のものをすこし見てみよう。これは、相当の数がある。たとえば『文選』を調べれば、淵明のものをのぞいて、十一の用例がある。一語の用例として、すくなくはない。

(a)若其舊俗　その旧俗の若きは
終冬始春　冬を終りて始めて春となれば
吉日良辰。吉日　良辰に
置酒高堂　高堂に置酒して
以御嘉賓　もって嘉賓に御む
（晉・左思「蜀都賦」）

(b)酣滑半　酣滑　半ばにして
八音并　八音　并さる
歡情留　歡びの情は留まり

良辰征　良辰は征く
（晉・左思「呉都賦」）

(c)惟永初之有七兮　惟れ永初の有七
余随子乎東征　余　子に随って東に征けり
時孟春之吉日兮　時れ孟春の吉日
撰良辰而將行　良辰を撰んで将に行かんとす
（晉・班昭「東征賦」）

(d)良辰感聖心　良辰　聖心を感ぜしめ
雲旗興暮節　雲旗　暮節に興る
（宋・謝靈運「九日、宋公の戲馬臺の集に従ひ、孔令を送る詩」）

(e)相與觀所尚　相ひ与に尚ぶ所を観
逍遙撰良辰　逍遙して良辰を撰ばん
（晉・左思「招隠詩」其の二）

(f)良辰在何許　良辰　何許にか在る
凝霜霑衣襟　凝霜　衣襟を霑す
（魏・阮籍「詠懐」其の十）

(g)大鈞載運　大鈞は載ち運り
良辰遂往　良辰は遂に往く
（晉・盧諶「劉琨に贈る詩」）

(h)裝成候良辰　装を成して良辰を候ち
漾舟陶嘉月　舟を漾べて嘉月を陶しむ
（宋・謝惠連「西陵にて風に遇ひ康樂に獻ず」）

(i)良辰竟何許　良辰　竟に何許ぞ
夙昔夢佳期　夙昔　佳期を夢む
（齊・謝朓「郡に在りて病に臥し、沈尚書に呈す」）

(j)天下良辰・美景・賞心・樂事、四者　天下の良辰・美景・賞心・樂事、四者は并せ離し。
離并。
（宋・謝靈運「魏の太子の鄴中集の詩に擬す・八首」序）

(k)眷然惜良辰　眷然として良辰を惜しみ
徘徊踐落景　徘徊して落景を踐む
（梁・江淹「雜體詩」遊覧）

(a)(b)(c)の例は、あきらかに「めでたい日」であり、それにともなう遊宴のよろこばしい時間である。(d)も(b)に近く、九月九日の重陽の節句という「良辰」が、宋公の心を感ぜしめたから、宴が張られることになった。(e)(f)(g)(i)などは、「幸福な時間」とでも訳されるべきか。そこには「めでたい日」であるがための特別のよろこびが前提としてある。(h)(j)(k)などは、「気持ちのよい日」と解してさしつかえないのだろうが、そこにも「めでたい日」の遊覧・行楽の感覚が、まちがいなく生きている。(h)(j)(k)の例が、陶淵明以後に属することは興味深いが、それはおいて、どの例にも、「めでたい日」の投影がみえることはあきらかと思う。

ほかにも「良辰」の例はある。わずらわしいので、二例だけあげよう。

(l)姑洗應時月　姑洗　時月に応じ
元已啓良辰　元已　良辰を啓く

（晉・張華「上巳篇」）

(m)未若任所遇　未だ遇する所に任ずるに若かず
逍遙良辰會　良辰の会に逍遙せん
（晉・王羲之「蘭亭詩」）

二例ともに三月上巳の節句をさすこと、あきらかだろう。日本に伝わって「桃の節句」と呼ばれるようになったこの日。その「めでたい日」という感覚が、「良辰」という言葉の核にありつづけたことを、無視できないのである。

五

陶淵明は、もう一首、劉柴桑に詩を贈っている。次の詩である。

酬劉柴桑　劉柴桑に酬ゆ
窮居寡人用　窮居　人用寡く
時忘四運用　時に四運の周るを忘る
櫚庭多落葉　櫚庭　落葉多く
慨然知已秋　慨然として已に秋なるを知る
新葵鬱北牖　新葵　北牖に鬱たり
嘉穟養南疇　嘉穟　南疇に養ふ
今我不為樂　今我楽しみを為さずんば
知有来歳不　来歳有りや不やを知らんや
命室攜童弱　室に命じて童弱を攜へ
良日發遠遊　良日　遠遊に発せん

いまたのしみをつくさなければ、来年などというものがあるかどうかわかりはしない。幼な児をつれて、「良日」に遠くへ遊びにでかけよう。淵明は、またしても「良日」に出かけるという。これも、ただ「天気のよい日」では、ないだろう。劉柴桑や慧遠の白蓮社の信徒が、教義の中心として大切にした仏典『般舟三昧経』に、次のようにある。

不得拜於天、不得祠鬼神、不得視吉良日、不得調戯。
（天を拜するを得ず、鬼神を祠るを得ず、吉良日を視るを得ず、調戯するを得ず。）

仏の教えに帰依する者は、「吉良日」をいわってはいけないというのである。仏教は、中国にあっては、最初から土着の信仰や民俗に対して寛容だったのではないらしい。陶淵明の時代でも、土に根ざした信仰と習俗は、仏教の教義とぶつかりあっていたのだ。そうであれば、淵明が仏教についてたちいった理解をしていながら、劉柴桑という仏教徒にかたくなな拒絶の姿勢を貫いた意味もうかびあがってこよう。「吉良日」や「良辰」を、仏教の教義がいくらいわうなといっても、彼は従えなかった。人間の日常を拠点にして世界をみようとしていた彼の姿勢が、そういう選択をさせたのだ。選ばれた白蓮社員として浄土に救われることより、田園の日常の中に生きることを望んだ淵明のすがたを「良辰」と「良日」にこだわる詩から、のぞき見てもよいだろう。

（文学部教授）

※『荆楚歳時記』は平凡社東洋文庫版をもとに訓読し、原文は紙幅のため割愛した。なお「辰良」の例は除外した。